

垣根を越えよう

第24回 日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター

第2号

発行：2010年7月31日(土曜)

編集：第24回日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター編集班



垣根を越えよう

プレナリーセッション(全体会合) 骨格固まる

分野を超え、予防、治療、ケア、支援の課題を共有

第24回日本エイズ学会学術集会・総会は、3日間の会期中、プレナリーセッション(全体会合)を毎日、開くことがプログラム編成上の大きな特色のひとつになっている。そのプレナリーセッションの骨格がほぼ固まった。別表のように、初日の11月24日は午後、2日目と3日目は午前中にそれぞれ約1時間半のセッションが組まれている。

基礎、臨床、社会のそれぞれの分野の専門家が、他の分野の人に向けて分かりやすく現状を報告する。プレナリーセッションのこうしたコンセプトは、今学会のテーマ「垣根を越えよう」を具現化するものでもある。プログラム委員会では、同一時間帯にはあえて他のプログラムを組まず、学会参加者全員がプレナリーセッションに出席できるかたちをとっている。

24日は、国境という「垣根」を視野に置き、国際的なHIV/エイズの流行の中で日本の対策を考えるセッションになる。臨床からは、先進国、途上国それぞれの抗レトロウイルス治療について、カナダのトロント大学医学部教授でトロント病院免疫不全クリニック臨床研究部長のシャロン・ウォルムズリー博士、ウガンダのマケレレ大学医学部教授のエリ・カタピラ博士が報告を行なう。

カタピラ博士はウイーンで開かれた第18回国際エイズ会議最終日の7月23日に国際エイズ学会(IAS)の理事長に就任したばかり。世界のHIV/エイズ対策のキーパーソンの一人である。

基礎分野から報告を行なう国立感染症研究所エイズ研究センターの武部豊博士はHIV分子疫学の研究成果を通し、日本の流行がどこに向かうのかを報告する。社会分野の「治療へのアクセス - 日本と東アジア」はHIV陽性者の視点からの報告となる。

25日は治療の進歩によって、HIV陽性者の長期生存が可能になった現状を踏まえ、長期療養に伴うさまざまな課題が取り上げられる。臨床分野から東京都保健医療公社荏原病院の看護師、有馬美奈さん、基礎分野からは薬剤耐性ウイルスの研究に取り組む国立病院機構名古屋医療センターの杉浦互・臨床研究センター感染免疫部長、社会分野からは放送大学の井上洋士教授がこれまでの業務経験や調査研究の成果にもとづく報告を行なう。

臨床、基礎、社会のアプローチはそれぞれに異なっており、一見すると関係がなさそうにも見えるが、そのいずれもが

プレナリーセッション(全体会合)

グランドプリンスホテル高輪 プリンスルーム

11月24日(水) 午後1時10分～3時50分

臨床



エリ・カタピラ氏(左)とシャロン・ウォルムズリー氏

ARV in the developed world Triumphs and Tribulations
(先進国における抗HIV療法 成功と試練)

.....Sharon Walmsley (シャロン・ウォルムズリー)

ART in the developing world Progress and Challenges
(途上国における抗HIV療法 成果と課題)

.....Elly Katabira (エリ・カタピラ)

基礎

世界からみた日本のHIV感染症の分子疫学

我が国のHIV流行はいかにして始まり、

どこに向かおうとしているのか.....武部豊

社会

治療へのアクセス - 日本と東アジア(演者未定)

11月25日(木) 午前10時～11時半

臨床

HIV陽性者のセクシャルヘルスケアとその周辺.....有馬美奈

基礎

薬剤耐性HIV研究の現状.....杉浦互

社会

長期療養時代のHIV陽性者とその生活.....井上洋士

11月26日(金) 午前10時20分～11時50分

臨床

HIV陽性者のメンタルヘルスケア.....小島賢一

基礎

エイズワクチン開発: HIV感染症克服への挑戦.....俣野哲朗

社会

MSMのHIV/AIDS疫学サマリー.....市川誠一

(敬称略、タイトルはいずれも仮題です)

HIV陽性者の長期療養を支える包括的な対応という観点からとらえれば、重要なピースというべき役割を担っている。そのことが分野を超えて理解できる貴重なセッションになりそうだ。

26日はHIV感染の今後の拡大にどのようにして歯止めをかけるかという課題が共通テーマになるが、そのアプローチもまた多様である。臨床分野から荻窪病院血液科カウンセラーの小島賢一さん、基礎分野からはエイズワクチンの研究を進める東京大学医科学研究所の俣野哲朗教授、社会分野はMSM（男性とセックスをする男性）のHIV感染予防策と取り組む名古屋市立大学の市川誠一教授が壇上に立つ。

とりわけ注目しておきたいのは予防と支援の両立という課題である。これは臨床、基礎、社会の3分野が共通して担うべき課題でもある。たとえば、予防はHIV感染の高いリスクにさらされている集団との信頼関係を抜きにして語ることはできない。それはワクチンの治験をどのように進めるかといった問題を考えるだけでも明らかだろう。臨床分野からの報告が「HIV陽性者のメンタルヘルスケア」であるのも、予防と支援の相互関係を考えるうえで示唆的である。

さまざまな場面での 具体的運営スタイル、 決定進む

プレナリーセッションに加え、第24回日本エイズ学会学術集会・総会のプログラム委員会では、セミナー・シンポジウムの選定や口頭演題、ポスター発表の時間枠、会場設定などの準備が急ピッチで進められている。また、NGO向けに展示スペースを確保し、HIV陽性者の当事者団体、支援団体が募集するHIV陽性者参加スカラシップにも積極的に協力するなど、「垣根」を超えた参加枠の拡大に取り組んでいる。

セミナー・シンポジウムを充実。 オーラル発表厳選し、 ポスターセッションを拡充

プレナリーセッションが他分野の人に向けて、各分野の課題を理解してもらうことを基本コンセプトとして編成されるのに対し、セミナー・シンポジウムはテーマをしばり、いま何が大事なのかをそれぞれの分野の人が深く考える機会を提供することが目的となる。

プログラム委員会によると、3日間の会期中に予定されるセミナー・シンポジウムは約25本になる見通しで、テーマの調整を続けている。

会期中はグランドプリンスホテル高輪、ザ・プリンス さくらタワーの両会場で600人収容のプリンスルームをはじめ、6か所のシアター、会議室がプレナリーセッションやセミナー・シンポジウム、口頭の一般演題などの発表会場となる。また、ポスター会場も約270平方メートルのスペースを確保する予定だ。

プレナリー、ラパトアセッションの開催時間帯には他のプログラムが入らないこともあり、一般演題の発表時間枠はかなり制限される。したがって、口頭での発表は厳選されることになるが、プログラム委員会ではその分、ポスターセッションのスペースを広めに確保し、ポスター発表の2交代、もしくは3交代制の導入も検討しつつ、発表の機会を極力、多く提供する方針を打ち出している。

また、展示スペースでは、企業向けの他にNPO向け展示ブースの空間を広く取り、展示を含む情報交換と交流の場を確保できるようにする。

さらにHIV陽性者が参加しやすい条件を整えるため、陽性者向けの休憩スペースも確保する方針だ。

第24回日本エイズ学会学術集会・総会

重要な日程

- 9月20日 ミレニアム開発目標（MDGs）国連首脳会合（NY、～22日）
- 10月4日 世界基金第3次増資会議（NY、～5日）
- 11月11日 G20首脳会議（韓国・ソウル、～12日）
- 11月13日 APEC（アジア太平洋経済協力）首脳会議（横浜、～14日）
- 11月24日 第24回学術集会・総会（東京、～26日）

問い合わせ先

学術事務局

東京大学医科学研究所先端医療研究センター・感染症分野内

〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1

学会事務局

株式会社微生物科学機構内

〒112-0002 東京都文京区小石川4-13-18

総会運営事務局

コンベンションリンケージ内

〒102-0075 東京都千代田区三番町2三番町KSビル

TEL:03-3263-8688 FAX:03-3263-8693

E-mail aids24@secretariat.ne.jp

なお、本紙へのお問い合わせも上記コンベンションリンケージ内総会運営事務局までお願いします。

ニューズレターバックナンバー

学術総会ウェブサイトからPDFファイルにてダウンロードできます。ぜひご利用ください。

悪性腫瘍に焦点をあて、 初日から注目シンポ。 来年の釜山ICAAPに向けた討議も

11月24日（水）から3日間にわたる第24回日本エイズ学会 学術集会・総会では、初日の午前中から注目のシンポが予定されており、その内容もほぼ固まりつつある。

エイズ治療の進歩でHIV陽性者の長期生存が可能になったことから、HIV感染と悪性腫瘍との関係が注目されるようになってきている。悪性腫瘍をテーマにした24日午前9時45分からのシンポジウムは、そうした現状に対応するものだ。

HIV陽性者の長期生存に伴い、HIV感染者に合併感染するウイルスが原因となった悪性腫瘍（肛門癌、子宮頸癌、悪性リンパ腫、肝細胞癌など）だけでなく、非AIDS関連悪性腫瘍の頻度の増加が懸念されている。このような現状を踏まえて2時間のシンポジウムでは「本邦における悪性リンパ腫の現状と課題」「子宮頸癌（ワクチン）定期検診の話題も含めて」「HIV感染者の高齢化と非AIDS悪性腫瘍」「HIV感染症と肛門部の腫瘍（肛門癌、コンジローマについて）」といったテーマが取り上げられる予定だ。

同じ24日の午前10時15分から1時間半のシンポジウム「TREAT Asia」では、アジアのHIV/エイズ対策が取り上げられる。

韓国の釜山では来年8月、第10回アジア太平洋地域エイズ国際会議（ICAAP）が開催されることから、シンポにはアジア太平洋エイズ学会（ASAP）の前理事長で、釜山ICAAPの準備にあたるミュンファン・チョウ博士（韓国）、現在のASAP理事長であるザヒド・フセイン博士（パキスタン）らが参加する。初日のプレナリーセッションとあわせ、国境の「垣根」を超える議論が期待できそうだ。

ラパトアセッションの 報告者決まる

最終日の11月26日（金）午後4時40分から1時間にわたって開かれるラパトアセッションでは、基礎、臨床、社会各分野のラパトア（報告者）が3日間の会期の成果を集約して報告する。

そのラパトアとして、基礎分野は大阪大学微生物病研究所の塩田達雄教授（ウイルス感染制御）、臨床分野は兵庫医科大学の日笠聡講師（血液内科）、社会分野は慶應義塾大学の樽井正義教授（倫理学）が起用されることになった。

各ラパトアにはそれぞれ4、5人の若手参加者が補佐となり、分担してセッションへの出席や報告のまとめの助けを行なう。

ラパトアセッションでの報告には、各セッションで発表されたスライドの一部も使用されることになる。

HIV陽性者参加支援 スカラシップ募集中

HIV陽性者の第24回日本エイズ学会 学術集会・総会への参加を支援するため、HIV陽性者参加支援スカラシップ委員会がスカラシップ利用希望者の募集を行っている。支給対象（応募資格）はHIV陽性者で、50人程度に学会登録費および宿泊交通費の一部が支給される。

応募締め切りは10月14日（木）必着。

このスカラシップは《HIV陽性者にとって、医療は切実な問題であるにも関わらず、専門家が意見を申し合せて討議し、また、新たな治療が提示される学会や学術集会に触れることはこれまで稀なことでした》という認識のもとに、2006年に第20回日本エイズ学会 学術集会・総会が東京で開かれたさい、陽性者が学会に参加しやすい条件を整える目的で創設された。社会福祉法人はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人ふれいす東京、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスの3団体が委員会をつくり、厚生労働省、エイズ予防財団、日本エイズ学会、日本製薬工業協会が後援している。

スカラシップ委員会では資金を支える寄付への協力も広く呼びかけている。

応募等の詳細は <http://www.ptokyo.com/scholarship/>

《開催概要》

第24回日本エイズ学会学術集会・総会

24th Annual Meeting of the Japanese Society for AIDS Research

テーマ 垣根を越えよう

会長 岩本愛吉

（東京大学医科学研究所先端医療研究センター・感染症分野教授）

会期 2010年11月24日（水）～26日（金）

主催 日本エイズ学会

会場 グランドプリンスホテル

高輪 ザ・プリンス

さくらタワー東京

〒108-8612

東京都港区高輪3-13-1

<http://www.secretariat.ne.jp/aids24/>



さくらタワー（上）と
ホテル全景

第18回

国際エイズ会議

2010.7.18～23

オーストリア・ウィーン

写真はフリオとウィーンのコチエアーが開会を宣言する前の表彰式の一場面です。壇上の人たちがベアになって何組も表彰されました。多くはコミュニティーで薬物使用者やHIVのケア、人権などの支援をしている人たちだと紹介されていました。一眼レフを持ってきましたが、望遠レンズは暗く会場が暗さに焦点が合いにくかったので、ビデオ機のカメラで撮りました。(撮影・岩本愛吉さん)



「Rights Here, Right Now (いまこそ人権を)」をテーマにした第18回国際エイズ会議が7月18日から23日まで、オーストリアのウィーンで開かれた。会議組織委によると、参加者数は1万9300人で、会議運営に加わったボランティア770人を加えると2万人を超える大会議だった。

希望と不安

会議最終日の23日に出されたプレスリリース (Day6) の主見出しは《AIDS2010で報告された科学的な成果は、将来に大きな期待が持てるものであり、現在の対策を進めることが必要だ》と力強い。だが、サブ見出しでは《HIV感染の流行の交差点で、医学の進歩に勇気づけられつつも、対策拡大のための資金の停滞を懸念》とトーンダウンする。

会議の雰囲気と世界のエイズ対策の現状を反映した見出しといっていだろう。本文の書き出しは以下になっている。

「世界のエイズ・コミュニティは本日、隔年開催の会議の閉幕にあたり、研究と対策拡大の成果がエビデンスとして明確に示される一方で、いままお対策資金拡大、人権の擁護、科学的に信頼できる予防戦略の普及が緊急課題であることを明らかにした」

取りあえず重くのしかかるのは、2008年秋のリーマンショック以来の金融危機による資金不足傾向だろう。HIV/エイズ対策はこの10年の努力で、なんとか成果が出始めたところだ。ただし、HIV陽性者2人が抗レトロウイルス治療を開始できるようになる間に、5人が新たにHIVに感染するというレベルの成果であり、治療の普及はまだ、流行の拡大ペースに追いついていない。

AIDS2010の会長で、この会議を最後に国際エイズ学会 (IAS) 理事長の任期を終えたカナダのフリオ・モンタナー博士は閉会式で「各国政府は経済危機を理由にするが、これはおかしい。問題は資金の有無ではなく、優先順位である。ウォール街の緊急事態やエネルギー危機には、何十億、何百億ドルの資金が速やかに動員される。人々の健康にも同様の対応がなされて当然だろう」と語った。だが、その「当然」の主張が各国政治指導者にも共有されるのかどうかは微妙だろう。ウィーンは希望と不安の交錯する舞台となった。

完治は可能か

ウィーン会議に先立って開かれたワークショップ「完治に向けて：HIV貯蔵庫とその制御戦略」には、世界の基礎医学者、臨床医、科学ジャーナリスト、コミュニティ指導者、研究基金関係者ら200人が集まり、感染した人の体内のウイルスを完全に制御することは可能なのか、可能だとすればそれはどのような方法なのかを議論した。

現在の抗レトロウイルス療法 (ART) では、治療がうまくいっても、HIVは体内のいくつかの部位の細胞に隠れ潜んでいる。こうした細胞は「HIV貯蔵庫」と呼ばれ、患者がARTを中止すれば、その貯蔵庫からウイルスが再び増加することになる。

会議初日のプレナリーで報告を行なったオーストラリアのモナシ大学のシャロン・ルイン博士はそうした議論を踏まえ、完治戦略について、functional cure (実質的な完治) とsterilizing cure (感染の完全解消) の2つの考え方を示した。functional cureは抗レトロウイルス治療をやめた後もHIVの長期コントロールが可能になる状態、sterilizing cureはHIVが体内から完全に排除され

た状態で、いずれもHIV貯蔵庫が研究の大きなターゲットになっている。

ウィーン会議最終日に国際エイズ学会 (IAS) の新理事長となったウガンダのエリ・カタビラ博士はワークショップについて、「HIV貯蔵庫の研究はまだ初期段階であるが、重要な知見が報告され、何年か先に大きな成果が期待できる課題が示された。ARVに生涯にわたって頼らなくてもすむような新たな治療法を精力的に探っていかなければならない」と語っている。

ウィーン宣言： 科学的根拠に基づく薬物政策を

AIDS2010の大きな特徴の一つは、会議の公式宣言としてウィーン宣言が発表されたことだ。宣言は各国政府に対し、薬物政策を取り締まり中心の「麻薬戦争」アプローチから、科学的なエビデンスにもとづき、薬物使用者の人権と医学的なニーズを重視したアプローチへと転換するよう求めている。世界の多くの国が採用している薬物政策に対して、「注射針・注射器具交換プログラムや代替薬物療法などのHIV予防介入策を導入することを妨げている。有効性はエビデンスとして示されているのに、こうした介入策へのアクセスは限られている」と強く批判し、研究者を中心にインターネットで幅広く署名を求めた。

組織委員会の公式ブログによると、会議の閉幕前日の7月22日現在で1万2725件以上の賛同署名が寄せられたという。宣言の日本語仮訳はHATプロジェクトのブログに掲載されている。

http://asajp.at.webry.info/201007/article_1.html

(文・宮田一雄)

日本エイズ学会「学術集会とその時代」 歴代会長に聞く 2

池上千寿子さん

第20回日本エイズ学会学術集会・総会会長（2006年）



第20回学会の記者ブリーフィングで
（撮影・菊池修）

エイズ研究会の時代から数えて20年目となる2006年の第20回エイズ学会学術集会・総会は、さまざまな意味で節目の大会だった。会長の池上千寿子さんは特定非営利活動法人ぷれいす東京の代表。それまで19回の会長は医師または医学研究者で占められ、NGOからの会長はそれだけで異色だったし、女性が会長を務めるのも第5回（1991年）の中井益代会長以来2人目だった。

NGOが積極的に学会に参加するようになった。その反映でもあるんでしょうね。

研究に協力する、あるいは研究の対象になるというかたちでの関与は以前からあったのですが、HIV陽性者やNGOなどのコミュニティが直接、研究体制を担えるようになったのは2000年ごろからです。NGOは研究する仲間であり、NGOならではの視点で研究ができ、その成果を当事者やコミュニティに返すことができる。研究成果の発表を通して、そうしたことが認められるようになりました。その積み重ねが認知され、NGOから会長が出てもいいのではないかとということになったのでしょうか。

会長を引き受けてほしいと言われたのはその2年ほど前ですか。

当時の木村哲理事長からお話をうかがい、はじめは冗談ではないかと思いました。無理ですとお断りしたのですが、私たちが手伝いますからとおっしゃってくださったので、それならやりましょうと決意しました。プログラム委員長の山本直樹先生、開催時の理事長の岩本愛吉先生にもずいぶん助けをいただきました。引き受けた以上は最後までできなかったことをやりたいと考え、運営委員会にはHIV陽性者にも入ってもらいました。横浜で国際エイズ会議が開かれたときには、HIV陽性者やNGOの参加を促進するため、コミュニティリエゾン委員会が設けられています。その国内版のようなものです。

1994年8月に横浜で開催された第10回国際エイズ会議は開会式に皇太子ご夫妻や村山富市首相（当時）も出席する大会議だった。HIV陽性者が積極的に会議で発言するようになったのはその5年ほど前からで、そうした動きが世界のエイズ対策を大きく変えようとしていた。横浜会議でも、世界保健機関（WHO）と国際エイズ学会（IAS）の強い要望を受け、HIV陽性者やNGO関係者の参加促進をはかる窓口としてコミュニティリエゾン委員会が設置され、その代表に池上さんが指名された。

プログラムには横浜以来の人脈も生きていますね。

記念講演には、ワクチン研究に取り組む米ハーバード大学医学部霊長類研究所のポール・ジョンソン准教授とHIV陽性者世界ネットワーク（GNP+）の創始者であるカナダのドン・デュガニエ氏をお招きしました。デュガニエ氏は1989年にHIV陽性者として初めて国際エイズ会議でスピーチを行なった人で、横浜会議でも、いろいろと力を貸してくれました。

第20回学会のテーマは「Living Together」。HIVに感染した人も、していない人も、感染しているかどうか分からない人も、「私たちはすでに一緒に生きている」ということを伝えるメッセージである。デュガニエ氏の存在でも明らかなように、「もうすでに」というところが重要な意味を持っている。日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス（JaNP+）はばたき福祉事業団、ぷれいす東京の3団体を中心になってHIV陽性者のための参加スカラシップのプログラムを創設したのも、第20回学会からだった。

エイズ対策の観点からすると、2006年はどんな年だったのでしょうか。

国際的にはHIV/エイズの予防、治療、ケア、支援の大切さが再認識されていた時期です。前年のグレンイーグルスサミット（主要8カ国首脳会議）で、ユニバーサルアクセスが大きな目標として掲げられ、06年の国連エイズ対策レビュー総会で採択された政治宣言でも2010年末までにそのユニバーサルアクセスを実現することを各国が約束しています。国内では、神戸で第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議が開かれた翌年で、HIV新規感染者の報告は増加を続けているのに、HIV/エイズの流行に対する関心は非常に低かった。性がからむと、関心はあっても、とりあえず触れないでおきたいといった傾向が強くなる。そうした傾向はいまも続いているのではないのでしょうか。

社会的な関心が低下する中で、エイズ対策に取り組む人たちはねばり強く活動を続けていた。その意味で、1か月余り前からコミュニティアクションという一連のエイズキャンペーンのイベントが学会と連動するかたちで開催されたのも当時の注目すべき動きだった。手前ミソながら、会期中の3日間、学会のニューズレターも発行され、それが今回のニューズレター「垣根を越えよう」の先駆的試みにもなっている。

第20回日本エイズ学会学術集会・総会

日時 2006年11月30日～12月2日

会場 日本教育会館、学術総合センター（東京都千代田区一ツ橋）

テーマ Living Together ネットワークを広げ真の連携を創ろう

記者レポート エイズ対策 課題とその論点(2)

エイズキャンペーン

5月15日。新宿のコミュニティセンターaktaで、一つのフォーラムが開かれた。「Making the AIDS Campaign ~みんなでテーマを考えよう」と題されたそれは、世界エイズデーを中心とした国内のエイズキャンペーンの年間テーマを決めるプロセスを、コミュニティに立脚したものにしよう、と呼びかけられたものだった。20名余りが参加した。

このフォーラムでテーマを決定する、というわけではない。しかし、決定に至る意見やアイデアを広く出していく枠組を作り出す場とする、と呼びかけ人でエイズ予防財団理事の宮田一雄さんは言う。

aktaでのフォーラムの1週間後にも、ねぎし内科診療所を会場に2回目のフォーラムが開催され、約15名が参加した。

毎年エイズデーに先立って発表され、ポスターやウェブに掲載されるキャンペーンテーマ。だが、どのように決定し、今年、なぜそれなのか。思えば誰もよくわからないまま、いつのまにかテーマは決まってきた。その当然の帰結なのか、発表の直後から、HIV活動に取り組む人びとのあいだでさえ、テーマは関心を払われない。そして1年後、去年のテーマがなんだったか、思い出さえない。

エイズキャンペーンのテーマの制定過程に、HIVコミュニティが今年初めて参加したのなら、それは驚きた。

国家のエイズ施策の実動部隊であるエイズ予防財団が、1年の取り組みを象徴するものとして発表するテーマとは、^{ひっきょう}畢竟、こうしたものなのだろうか。そのテーマを軸に展開されるエイズキャンペーンとは、なんなのだろうか。あらためて考えてみたい。

*

別表に、この15年のエイズ予防財団キャンペーンテーマ(啓発の主題)を掲げてみた。

2002年までは、UNAIDSが発表するテーマをふまえ、国内テーマは制定されてきた。英語と見比べてみると、訳によってはニュアンスがずれたりトーンが弱められていると感じるものもある。英文そのままが採用された年もあるが、省略型疑問文など英文的には少し難しく、誰もが見るべきポスター等への掲載には疑問が残る。

2003年からは、英文から離れた啓発テーマが設定されている。世界テーマとは別に、国内課題に即したテーマを掲げることは、むしろ推奨されている。しかし、「知っていますか?」「思っていますか?」と、説教調が気にもなる。

そして2006年からは、CBO(コミュニティ・ベースド・オーガニゼーション)が提唱した「Living Together」を、官側がメインに据え、それへのサブテーマを公募するかたちで制定されている。行為への着目が大事とされるHIV感染予防や啓発に、「大切な人」「ちょっとの愛」などの言葉は、いささか時計が巻き戻った感じも抱か

せる。

「We are already living together」とは、いわば従来の「予防啓発」とは90度方向がずれるメッセージでもある。陽性者増加の現実に、「上から」的な予防啓発の無力さを嘆み締め、「私たちは陽性者も非感染者も、すでに、一緒に生きている」という世界観の転換をはからないかぎり、つきへは進めないはずだという、主としてMSMコミュニティから発されたメッセージである。「already」は、きわめて重い一語だ。「予防」を名称にいただく機関がこのフレーズを発することに、私は内心の忸怩を感じずにはいられない。エイズキャンペーンの重点をどこへ置くべきなのか、エイズ責任官庁・機関も混迷しているのだろうか。2009年のサブテーマは、その意味でブラックユーモアでさえある。

先述のフォーラムでは、変遷をたどってきた財団のテーマへ、つぎのような意見も聞かれた。

「WACやUNAIDSはその時々何何を訴えたいのかを明確にテーマで示し、その移り変わりがわかる。日本も今年は何を訴えたいのかを打ち出せるメッセージであってほしい」

「サブタイトルに整合性がない。毎年の課題を明確に主張した方がいい」

「世界のテーマに比べ、日本のテーマは意図がわかりにくい」

たんにキャンペーンの作文技術の巧拙ではない。テーマのわかりにくさ、不明確さは、日本のエイズ政策が、いま、なにを課題とすべきか、その方向性の混迷によるものかもしれない。

*

社会的になにかを訴え、効果あるキャンペーンを作るためには、マーケティングの考え方を参照してみる、というのは、だれでもが考えつきそうなことではある。いまこの稿を書いている私の部屋にも、マーケティング本の1、2冊はある。こころみにそのどれでもいい、一冊を開いてみよう。

「どんな商品も、瞬時にして大きな売れ行きを示すことは、なかなかできません。中長期の時間が必要です。長い時間をかけて、消費者にリピート購入してもらい、新規顧客を獲得し、商品のポジションを築いていくのです」

「ターゲットは誰か。そのターゲットにどうすれば商品を効果的に伝えることができるか。市場は、新規購入とリピート購入、わずか2つの消費者行動で成り立っている」

エイズキャンペーン作りに示唆に富むメッセージととるか、よくあるビジネス書の誰にでも言える一般的なお談義ととるか、人それぞれだろう。だが、これからエイズキャンペーンを考えてみようとするにもかかわらず、その「顧客(ターゲット)」は誰で、そこにどんな「商品」を売ろうとしているのかに明確なイメージがないことに、はたと気づかないではいられない。「長い時間をかけて、商品のポジションを築く」と言われても、敗退を運命づけられた企業のような無力感を感じてしまうのはなぜだろう。「長い時間」はすでにたっているのに。

UNAIDSの「商品」では、「エイズには、なお烙印と差別がある」(2002年)とか、「エイズは、男性が鍵となる」(2000年)といった、明確なコンセプトが見て取れる。そうした商品コンセプトにもとづいて、マーケティング(キャンペーン)は組み立てられていくだろう。

マーケティング本には、しばしば「4P」ということが説かれる。Product(商品戦略)、Price(価格戦略)、Place(流通戦略)、Promotion(販促・広報戦略)だ。それをたどりながら、キャンペーンの流れを考えてみよう。

このさい売るのはなんでもいい。私自身は、受検数を5年で

2倍にするという「エイズ予防のための戦略研究」のお手伝いを少々していることもあり、「HIV検査」を売ってみたい。高邁な倫理道徳を説くよりも、「検査、受けてみませんか？」という具体のほうが、流れも作りやすい。おなじく病にかかわるキャンペーンでは、「終わった病気ではない」(結核)、「サーモグラフィ検査を受けましょう」(乳がん)と、きわめて具体的なメッセージが発せられている。

商品(Product)であるHIV検査は、なかなか買ってもらいづらい商品だ。「怖い」「陽性がわかれば社会的に抹殺される」「“不安な人”には関係あっても、“普通”な自分には関係ない」……この商品にこれまでついたイメージに、道の遠さが思いやられる。「増えています」「不安な人は検査へ」といった語りからは、売る側の都合は見えても、買う側の視点はうかがえない。

平成21年度(2009年)

Living Together ~いま、何をすれば良いのか聴かせて?~

平成20年度(2008年)

Living Together ~ちょっとした愛からはじまる事~

平成19年度(2007年)

Living Together ~大切な人を守るために~

平成18年度(2006年)

Living Together ~私に今できること~

平成17年度(2005年)

エイズ...あなたは「関係ない」と思っていますか?

平成16年度(2004年)

“HIV”と“エイズ”の違い、知っていますか?

平成15年度(2003年)

「エイズ」知ろう、話そう、予防しよう

平成14年度(2002年)

「エイズ」目をそらさないで考えてみよう!

(stigma and discrimination)

平成13年(2001年)

"I care... Do you?"

平成12年度(2000年)

エイズを知って あなたが変わる わたしも変わる

(AIDS, men make a difference)

平成11年度(1999年)

若い命のためにも、聞いて学んで、エイズのことを

(Listen, Learn, Live! World AIDS Campaign with Children and Young People)

平成10年度(1998年)

時代が変わる、君が変わる ~大切な人と生きるために~

(FORCE FOR CHANGE: World AIDS Campaign with Young People)

平成9年度(1997年)

子どもたちの未来のために!今、エイズを考えよう

(Children Living in a World with AIDS)

平成8年度(1996年)

エイズの時代をともに生きる

~希望に向かって、国境を越えて~

(One World, One Hope.)

平成7年度(1995年)

エイズに取り組む ~ひとりひとりの権利と責任~

(SHARED RIGHTS, SHARED RESPONSIBILITIES)

しかし、性行為のあるかぎり定期的な受検は、本人にベネフィット(利益)がある。「お誕生日には、もう一つの健康チェックも」など、ネーミングやパッケージなど、商品戦略を工夫することで“売れる”可能性はあるかもしれない。

しかもこの商品、価格(Price)はゼロ円だ。「保健所で、無料・匿名で」は、先人がこの20年ともかくも築いてきた、“わが社”の数少ない、誇るべき「ブランド」ではある。

だが、流通(Place、商品を置く場所)に難がある。通常の人にはなじみの薄い保健所で、1週か2週に一度、平日の日中のわずかな時間にしか売り出さない。しかもたいてい予約販売ときたものだ。夜間や休日の販売や、毎日、予約無しでも購入ができる旗艦店の充実も必要だろう。何年来も言われていることではあるが、そこまで見通さないと、マーケティング(キャンペーン)は成功しない。

さらに、性病や泌尿器科のクリニック、肺炎等の内科、口腔内の異変に気づく歯科など、潜在的な顧客層が訪れる場所での販促戦略(Promotion)は、キャンペーンに必須だ。ただし、どこへでも販促しては、費用とエネルギーのムダ。狙わなければならない。

そのうえに立って、広告や広報戦略が展開される。

広告といえば、たとえばビールを考えてみよう。「うまいビールです」と叫ぶだけでは、消費者は見向かない。しかし、「鮮度こそがうまさ」という違う切り口が発見できたとき(ビールに鮮度があると、それまで誰が気づいただろう)それはつぎつぎビールを送り出す活動的な工場の映像広告となって、「鮮度こそがうまさ」のメッセージとともに消費者の心に届く。

HIV検査という商品を、「自分の健康にプラスになるもの」という違う切り口でまとめたなら、「不安なら受けてください」「にじんで見えなくなった、以前のセックスパートナー」という広告は、かならずしもそぐわない。

*

ここでは「HIV検査」を例に、マーケティング本が説く4Pを机上で当てはめてみただけだが、それが検査でなく、「マイノリティとの共生」でも、「セクシュアリティの多様さへの理解」でも、「若者の性知識の向上」でも、考えの進め方は変わらないはずだ。

問題は、「標語」作文の巧拙などではない。冒頭に紹介したフォーラムでは、「耳障りでない言葉を選ぶのではなく、スキのある言葉を戦略的に用いる手法もある」「ハッとさせるメッセージがほしい」などの発言も記録されている。上記4Pのうち、広報戦略についての議論だが、とはいえ技法論を越え2010年の今年、キャンペーンの主題として、いわば商品として、なにを打ち出すべきか、考えはかならずしも深まらなかった。

行政文書の「大綱」の類いには、課題を「総花的」に羅列してこと終われりとする性向が宿痾のように潜む。しかし、キャンペーンの“キモ”は、なにを伝えたいのかを明確にし、優先順位をつけること。そしてつねに受け手の視線、受け手の利益から考え、組み立てることにある。冷え込むエイズへの関心。その現実を否定はしない。しかし、受け手の視線、受け手の利益から出発し、マーケティングに言う「4P」を組み立てるキャンペーン作りを、私たちはこれまでしてきたらうか。

キャンペーン作りとは、向こう1年、応接室に掛けておく無難な絵を選ぶことではないはずだ。

(本稿は、永易至文が担当しました。)

RENT

ミュージカル『RENT』がニューヨークのオフ・ブロードウェイで初めて上演されたのは1996年の冬だった。小さな実験劇場から出発してたちまちのうちに注目を集め、その年の春にはブロードウェイの大劇場で長期公演が決定した。4月にピューリッツァー賞（1996年ドラマ部門）を受賞、さらに6月にはトニー賞を4部門で獲得している。

時代の空気を色濃く反映したこの作品は、「RENT-heads」と呼ばれる熱心なファンを生み出すなど、大きな社会現象にもなった。舞台は現在までに日本を含む世界15か国で上演され、2005年には『ホーム・アローン』などで有名なクリス・コロンバス監督の手によって映画化もされている。

ニューヨークでは2008年の閉幕まで12年にわたって公演が続けられた。ブロードウェイ・ミュージカル史上8番目のロングラン記録である。米国は1980年代の初頭からHIV/エイズの流行との困難な闘いを続けてきた。抗レトロウイルス薬の多剤併用療法（HAART）による高い延命効果が先進諸国で広く確認されるようになったのは、奇しくも『RENT』初演と同じ1996年である。RENTの構想が具体化していったのは当然、それ以前のことだから、いわば米国でもHIV/エイズとの闘いの闇が最も深い時期だった。そのことを抜きにしては、RENT現象もまた、理解することはできないだろう。

物語の中心となるのは、ニューヨークのイースト・ビレッジに暮らす、人種もセクシュアリティも多様な8人の若いアーティストの卵たちだ。家賃も払えない貧しさの中で、病や孤独、将来への不安と戦いながら、夢をあきらめずに懸命に生きる若者たちの1年間（1989～1990）が描かれている。脚本、作詞、作曲を手がけ、オフ・ブロードウェイでのプレビュー公演の当日に35歳の若さで死亡したジョナサン・ラーソン自身がそんなアーティストの一人だった。ミュージカル界に革命を起こしたいと考えたラーソンは、ブッチー二のオペラ「ラ・ボエーム」を元に、舞台を19世紀のパリから20世紀末のニューヨークへ、ヒロインたちの問題を結核からHIV/エイズや薬物依存、ホームレスに置き換えて、ロックやタンゴ、ポップスを融合した音楽にのせた、現代の物語を生み出した。

『RENT』には、HIV/エイズと闘ってきたニューヨークの記憶が息づいている。作品タイトルと同名の曲「Rent」には、「Everything is Rent」というフレーズが出てくるが、ここでの「Rent」は、「Rend」という動詞の過去分詞形、つまり「ずたずた

に引き裂かれた」の意味が込められている。1980年代のHIV/エイズが作り出した状況は、自分の身体に裏切られ、信じることで救われないという、まさに「ズタズタ」の現実だった。そんな中、細い糸をもう一度ていねいに張り巡らせていくように、ゲイ・コミュニティを中心に人びとが力を寄せあい、「生き方」を模索する。今では当たり前になっている「Safe Sex」も、その実践として生み出されたものだ。

HIVの自助グループの会合の様子を歌った「Life Support」、HIV陽性者や薬物依存者、ホームレスの人びとが「尊厳を持って生きることができるのか？」と自身に問いかける「Will I?」などの歌とシーンには、当時のコミュニティの様子が映し出されている。

多様なセクシュアリティが入り混じるセックスシーンを描いた「Contact」では、“latex rubber”（＝コンドーム）という言葉が繰り返される。第1部が最高潮に達する「La Vie Boheme」で、キャスト全員が高らかに宣言する“Act Up, Fight AIDS!”は、HIV/エイズの活動家グループ「Act Up（AIDS Coalition to Unleash Power）」のグループ名とスローガンだ。この曲の原型には、“body fluids, K.S. lesions, spotty lungs, transfusions, Silence equals death”という、エイズの日和見感染症の名前や、活動家たちが使ったスローガンも入っていた。

このように書くと、「しょせん20年前の米国の状況を描いた作品ではないか？」という声が聞こえて来そうだ。確かに、治療の進歩はHIV/エイズを取り巻く状況を大きく変えた。だが、『RENT』でラーソンが描こうとした社会の“現実”は、どこまで変わったと言えるだろうか。

作品が書かれた当時（1990年代初頭）抗レトロウイルス療法の延命効果はまだ明確に示されてはいない。長期服用に伴う耐性ウイルスの出現や副作用を克服することの困難さが強く認識され、希望はむしろ、失われていくことの方が多い時期だった。

そうした状況の中で、ラーソンは、HIV/エイズというテーマを一貫して「生きる」ことにスポットを当てて描こうとした。主人公の若者たちは、死や別れを経験し、友情や愛情、家族との関係に悩み、夢と現実の間で揺れながらも、「ありのままの自分」として生きることを誓う。作品の中で繰り返し歌われる「No day but today」は、HIVに感染しているかどうかに関わりなく、切なく響く。

時代に深く関わる作品であるからこそ、時代を超えた力を持つことが可能になることもある。「尊厳を持って生きることができるのか?」『RENT』が問いかけるこのメッセージは、HIV/エイズをめぐる「20年後の日本の状況」の中でも、未だ痛烈であると言わなければならない。（吉田智子）

映画版『RENT』（2005、米国）監督：クリス・コロンバス
ミュージカル『RENT』（制作：東宝）10月7日～12月16日
東京・兵庫・富山・名古屋を巡回

詳細は、<http://www.tohostage.com/rent/index.html>

編集を終えて

何ごとも成果が現れるまでには大いなる助走期間が必要です。11月の学会に向けた準備も、その意味では夏が勝負ということでしょうね。「垣根を越えよう」というテーマを体現するプログラムの骨格が徐々に形成される過程を直近で見つつ、不確定部分は報じられないという抑制も効かせての第2号編集作業になりました。それにしても暑いね、今年の夏

は。記者リポートの論点整理、今回は永易さんの単独執筆です。エイズ予防財団理事としてキャンペーンのテーマ選定には半ば以上、当事者的立場で関与しているため、私は涙の降板となりました。また、巻末のこの一本「RENT」は、日本を代表する「RENT-head」ともいうべき吉田智子さんに担当してもらいました。（編集長・宮田一雄）

本号では記者リポート「エイズキャンペーン」を担当。拙いながらもキャンペーン作り

とはなにかを考えてみたが、この小論は誰かを責めたり指弾したりするものでないことは強調しておきたい。いま、なにを進めるべきか。多くの人が混迷を感じているのは事実だ。自分の巣穴に籠り他者からの問いかけを遮断することが、その混迷を感じないですむ一番手っ取り早い方法だが、本紙がその対極に立つことは1号に記した通りだ。小論がさまざま立場の人が「垣根を越える」ための叩き台となれたら望外の喜びである。（永易至文）